

竹下 健次郎*

サウジアラビアのジェッダ空港に降りた私の最初の感想は、「もしここに石油が産出しなかったならば、トーブ姿のアラブ人は永遠に文明とは無縁に生き、そして死んでいくであろう」ということであった。この感想は、それから2週間にわたり、赤い土漠の風じんに目を傷め、灼熱の太陽に身を焦がされるに及んで、ますます強烈な印象と化していった。

そして、「もしここに石油が枯渇したならば、この人々はどうなるであろうか?」という疑問が湧いた。また、それはそんなに遠い将来のことではあるまいとも思った。

人間というものは、一たび文明という利器を味わったならば、もはやそれを避けては通らないから、石油なきあとアラブの人々は途方にくれることであろう。

されば、サウジの国王一派は、いまや真剣に、そして着々と、石油なきあと国土建設に余念がない。

ジェッダ市内の開発工事は急ピッチで進行していたが、その主力を担っているのが日本人と韓国人であるといつても過言ではない。そして、石油精製プラントやデサリー(海水の淡水化プラント)などの化工部門では日本人のウェイトが多いが、土木工事や住宅建設などのいわゆるインフラストラクチャー部門では、もはや韓国人に太刀打ちできなくなっているという。彼らは日本人の半分の労賃で働いているからである。

さて、「開発は環境の異変を伴う」ことは、古今東西を問わず真理である。しかし、「環境の異変は必ず公害を伴う」とは限らない。日本では残念ながら、「開発即公害」というイメージがあまりにも強い。「公害なき開発」がこれからの日本の宿命であるが、アラビアの砂漠の上に立ったとき、日本の自然環境の有難さをしみじみと感じた。

シェッダ市の宿舎に着いた私は、一見それらしいハウスに案内されたが、真夜中に「ブルンブルン」と腹(はらわた)を割るような振動の音に眼をさました。「ここは夜間でも道路工事をやるのかな?」と、憤然としたまま夜が明けた。しかし、その振動の発生源は階下の室のクーラーであった。早速検分すると、微細な泥土がクーラーの全面にくっつき、青息吐息で動いていた。サウジでは、亜硫酸ガスの公害はいざ知らず、「粉じん公害」は自然災害なのである。

大気に愛想をつかした私は、夢にまで見たオアシスを見学することにした。サウジの首都、リヤド市から約60km離れたところにアルハルジというオアシスがあると聞き、金曜日の休日を利用して四輪駆動車を走らせた。一行は現地人の運転手を加えて5人。走ること小1時間。こんなもりと茂った森が見え、やがて爽竹桃の美しい花が眼前に拡がり、小鳥の囀声も聞こえてきた。だがしかし、車からおりて一歩その森の繁みに足を踏み入れた途端、私は「あっ!」と驚いた。そこには腐敗した羊の頭が捨てられており、無数の蛆が群がり、悪臭鼻をつき、私はほうほうの態にてそこを抜け出したのであった。水の流れも不快を催した。2メートル足らずの小川はまるで下水溝と化しており、現地の人々はその水で平然と顔を洗い、口を濯いでいる。

*九州大学生産科学研究所教授、当協会常任理事

た。かくて、夢のオアシスのイメージは一瞬にして破れ去ったのである。



サウジアラビアのオアシス、アルハルジにて（右端が筆者）

都市では槌音高く開発が進められている反面、田舎では旧態然として不潔な環境が人々を支配しているというこのアンバランスこそ、これからの中東が解決しなければならない問題であろうと思いつつ、私は黄色い砂漠の国に別れを告げた。